

八代集離別歌羈旅歌考

村瀬 憲夫

はじめに

万葉集には多くの旅の歌が収められている。万葉びとは、行幸従駕のような晴れ晴れとした旅、官人としての役目を帯びての旅、また例えば防人のように徴用されての旅、あるいは私的な用事での旅などなど、様々な旅をした。また

人もなき空しき家は草枕旅にまさりて苦しかりけり

(万葉集卷三・四五二、大伴旅人)

旅と言へど真旅になりぬ家の母が着せし衣に垢つき
にかり

(万葉集卷二十・四三八八、占部虫麻呂〔防人〕)

の歌が示すように、当時の旅は、地方の役人として赴任地に住んでいる期間も旅であった。結局、都を離れている期間全てが旅であったのである。

そして万葉時代の旅は、

草枕旅を苦しみ恋ひ居れば可也の山辺にさ男鹿鳴く

も (万葉集卷十五・三六七四、遣新羅使大判官)

旅といへば言にぞやすきすべもなく苦しき旅も言に
まさめやも (万葉集卷十五・三七六三、中臣宅守)

という歌が示すように、基本的には「苦しい」ものであった。従って、万葉びとはよんどころない用事がない限り、旅はしなかつたのであろう。当時の旅が、このように、未知の経験に属する面が多ければ、それだけその感動もひとしおであったろうし、また都を離れている期間が全て旅であったのだから、その間にわき起こる感興も様々であったろう。万葉集に旅の歌が多いのも蓋し当然と言えよう。

このような旅の万葉歌は様々な特徴を有しているが、その最たる特徴は個々の歌が臨場感を色濃く留めている

ということである。確かに万葉の旅の歌と言えども、現地に立って詠じているものばかりではない。机上での想像の歌もあれば、創作の歌もある。しかし総体的には、万葉の旅の歌には、現地での生の雰囲気を感じているものが多いことは間違いない。

ではこの旅の歌は、時代が降るにつれて、どのように変わっていくのであろうか。万葉集の旅の歌を視野に置きながら、八代集に収められた「離別歌」「羈旅歌」の特色を追ってみたい。

—

八代集において、「離別歌」「羈旅歌」はどのような位置にあるのかを先ず見ておこう。

		古今集	後撰集	拾遺集 (拾遺抄)	後拾遺
離別	⑧	41	①⑨	46	⑧
羈旅	⑨	16	①⑨	18	⑨

金葉集	⑥	16	詞花集	⑥	15	千載集	⑦	22	新古今	⑨	39
	—	—		—	—	⑧	47	—	⑩	94	—

表中の各歌集欄の上段の丸囲みの数字は巻次、下段の数字は所収歌数を示す。

「離別歌」「羈旅歌」の部立は、『古今集』では、大きくは四季の部と恋の部との間に位置し、直接的には「賀歌」の部立の次に置かれている。『後撰集』では、『古今集』とは大きく異なり、「雑」(一〜四)部の次の巻十九に置かれ、集の末尾部に位置する。しかも離別歌と羈旅歌とは同一の巻(「離別」は前半、「羈旅」は後半)の中に収められている。『拾遺集』では、四季の部に続いて「賀」「別」となっていて、『古今集』の部立順に等しいが、「羈旅」の部立が存在しない。ただし、「別」部の末尾部(三三九〜三三三番歌、三四七番歌は除く)は、内容は羈旅歌である。従って、離別歌群と羈旅歌群とが同一の巻に収められているという意味では、『後撰集』と似通った形態であると言える。『拾遺抄』(十巻)は、部立順も「羈旅」部を欠くことも、『拾遺集』と同じである。ただ『拾遺抄』では羈旅歌群は見られない(二〇六、二二三、二二六、二二七番歌は羈旅歌に属する内容であるが、「別」部に散在しているに過ぎない)。「後拾遺集」は、『古今集』の部立順に同じである。ただ「羈旅」部の後に「哀傷」部が続いていて、『古今

集』の場合は「物名」部が続く点が異なる。『金葉集』（十巻）は、四季の部と恋の部との間に「賀」「別」部があって、部立配列の基本は『古今集』以来の伝統を引き継ぐ。『詞花集』（十巻）の部立順は、『金葉集』と同じである。『千載集』は、四季の部と恋の部との間に「離別歌」「羈旅歌」「哀傷歌」とが置かれている。『新古今集』は、四季の部と恋の部との間に「賀歌」「哀傷歌」「離別歌」「羈旅歌」の各部が置かれていて、『千載集』とも少し異なる。

「離別歌」「羈旅歌」各部の所収歌数は、表に見る通りである。『古今集』から『詞花集』までは、「離別」歌の方が圧倒的に多いことは一目瞭然である（ただし、『後拾遺集』は両者の歌数は伯仲している）。それに対して、『千載集』と『新古今集』は両者の歌数が逆転するという変化が見られ、両集に至って、「羈旅」歌が重視されるようになったことが分かる。

なお、その数はわずかではあるが、旅を契機としての「離別」ではない歌がある。

雷鳴の壺に召したりける日、大御酒などたうべ
て、雨のいたく降りければ、夕さりまで侍りて
まかりいでける折に、盃をとりて 貫之

秋萩の花をば雨に濡らせども君をばましてをしとこ
そ思へ

とよめりける返し

兼覽王

をしむらむ人の心を知らぬまに秋の時雨と身ぞふり
にける

（古今集巻八「離別歌」、三九七・三九八）

亭子のみかどおりぬたまうける秋、弘徽殿の壁
にかきつけける 伊勢

別るれどあひも惜しまぬもしきを見ざらんことや
なにか悲しき

みかど御覧じて御返し

身ひとつにあらぬばかりをおしなべて行きめぐりて
もなどか見ざらん

（後撰集巻十九「離別 羈旅」、一三三二・一三三三）

『古今集』はこの他に、三九九番歌、そして三九二番歌から三九五番歌（この四首はごく近距離の旅の折の歌と言えないこともない）が、旅の離別歌としては異質である。拾遺集以降はこういった種類の歌は収められていない。「離別歌」部が一層整備され、旅の離別歌という純粋性を備えるにいたったと言える。

以上、部立の有無、所収歌数の多寡という、歌集の編

纂という面から、八代集における「離別歌」「羈旅歌」の特色を見た。全般的に「離別歌」が優勢であるが、『千載集』と『新古今集』に至って、「羈旅歌」に重きが置かれていることは注目に値する。

さて、八代集のこの両部立の先蹤を、万葉集に求めるとすれば、万葉集卷十二（「万葉集目錄」では「古今相聞往来歌類之下」という標題を持つ巻である）の五つの部立のうちの「羈旅発思」「悲別歌」に当たるであろう。前者は、旅にある男（女の場合もある）が家郷に残してきた妻（夫）・恋人を恋しく思う気持を述べた歌、後者は旅立ちに際して、その別れを悲しむ女の歌、あるいは旅行く夫の安否を気遣い、夫への恋しさを詠む歌を、主として収めている。両部の所収歌数は、「羈旅発思」が六三首、「悲別歌」は三一首であり、また配列順序は「羈旅発思」の方が「悲別歌」に先だっており、八代集の場合と異なる。所収歌の内容的な面での、八代集のそれとの異同は、後に触れるが、部立という面で、万葉集のこの二部立は、八代集の二部立の創出に一定の影響を及ぼしていると言えよう。

二

次に、やはり外的な面での概観になるが、八代集の「離別歌」「羈旅歌」は、どのような土地が対象となっているのかを、通覧してみたい。八代集の「離別歌」部、「羈旅歌」部のそれぞれについて、旅の「目的地」と「詠歌地」（その歌が詠まれた土地。もちろん題詠・机上詠・観念詠も多い故、その土地に立っての詠という意味では必ずしもない。旅中の詠として表現されている土地という意味で用いた）とに分けて列挙する。地名の下の数字は回数を示し、数字の記されていないのは、一回を意味する。なお、二首一組をなす贈答歌の場合は、両首で一回と数えた。また、例えば『古今集』【離別歌】の〔目的地〕の項で、「東（あづま）」と「常陸国」「武蔵国」とが別に列挙してある。常陸国も武蔵国も広く東（あづま）に入るのであるが、詞書等を尊重して、強いて纏めることをせずに、別に掲げておいた。他も同様である。

古今集

【離別歌】

〔目的地〕東(あづま) 4、越国 4、筑紫 2、陸奥国

2、山(比叡山) 2、因幡国、近江国、常陸国、

武蔵国、花山、布留(大和国)、志賀

〔詠歌地〕かへる山 2、逢坂関 2、白山 2、音羽山、

山崎

【羈旅歌】

〔目的地〕東 4、唐国、隱岐国、越国、甲斐国、但馬

国、奈良(大和国)

〔詠歌地〕手向山 2、みかの原、泉川、鹿背山、明石

浦、八橋、隅田川、白山、ふたみの浦、天の川

後撰集

【離別】

〔目的地〕陸奥国 4、伊勢国 3、越国 2、出羽、東、

下野国、甲斐国、伊豆国、信濃国、美濃国、因幡

国、筑紫

〔詠歌地〕逢坂山、ふたみ山、あさまの山、不破関、

【羈旅】

〔目的地〕土左国 2、宮の滝 2、東 2、遠江国、陸奥

国、白山、初瀬、宇治

〔詠歌地〕初瀬川、たはれ島、ひぐらしの山、あしが

らの関、天の川

拾遺集

【別】

〔目的地〕陸奥国 4、東 2、豊前国 2、肥後国 2、太

宰府、筑紫、信濃国、参河国、斎宮

〔詠歌地〕逢坂関 2、しかすがの渡し、八橋、さらし

な山、かめ山、いきの松原、白河関、武隅松

【羈旅】

〔目的地〕筑紫 2、唐国 2、大隅国、難波、太宰府

〔詠歌地〕浜名の橋、たみの島、いなみ野

拾遺抄

【別】

〔目的地〕陸奥国3、豊前国2、参河国2、信濃国、
出羽国、備後国、丹後国、斎宮、東、太宰府、筑
紫

〔詠歌地〕逢坂関2、しかすがの渡し、八橋、さらし
な山、かめ山、いきの松原、白河関、武隅松

後拾遺集

【別】

〔目的地〕筑紫6、陸奥国4、唐国3、遠江国2、伊
予国2、越後国、筑後国、肥後国、能登国、讃岐
国、伊賀国、出雲国、对馬国、東
〔詠歌地〕逢坂関2、末の松山2、難波堀江、白河
関、宇佐、松山

【羈旅】

〔目的地〕筑紫7、熊野3、摂津国2、播磨国2、東
2、参河国、和泉国、近江国、尾張国、下野国、
陸奥国、出羽国、出雲国、伊予国、越後国、石
山、初瀬

〔詠歌地〕明石3、逢坂関、走井、吹上浜、堀江、こ

や、葦の屋、鏡山、関山、すのまた、信濃の御
坂、うるま、浜名の橋、しかすがの渡し、白河
関、きさ潟、須磨の浦、さやかた山、をばすて山

金葉集

【別】

〔目的地〕筑紫2、陸奥国2、丹後国、大隅国、伊勢
国、对馬国、太宰府
〔詠歌地〕逢坂関、をののふる江

詞花集

【別】

〔目的地〕陸奥国3、太宰府3、伊予国、加賀国、日
向国、唐国、東、斎宮
〔詠歌地〕いきの松原

千載集

【離別歌】

〔目的地〕太宰府2、京（↑太宰府、筑紫）2、越前国、土左国、越国、唐国、熊野、宇佐

〔詠歌地〕いきの松原、かへる山、をばすて山

【羈旅歌】

〔目的地〕東2、丹後国、美濃国、下野国、尾張国、

齋宮、高野（紀伊国）、京（↑大隅国）

〔詠歌地〕須磨（関、浦）4、逢坂関3、さやの中山

2、伊勢、天の橋立、あづさの山、住吉（松）、

忘れ井、しきつの浦、つもり沖、野島が崎、不

破の関、さつま潟、白河関

新古今集

【離別歌】

〔目的地〕陸奥国6、筑紫3、唐国2、美作国、甲斐国、太宰府、宮滝

〔詠歌地〕かへる山、逢坂関、衣河、阿武隈川、いき

の松原、淀の川、武隈の松、松浦、三輪の山、天

の川

【羈旅歌】

〔目的地〕東5、初瀬3、伊勢国2、唐国2、天王寺

2、和泉国、信濃国、摂津国、陸奥国、越国、熊

野、平城宮、たなかみ（田上）、京（↑筑紫）

〔詠歌地〕

さやの中山5、宇津の山4、伊勢（の浜荻）4、

松島（をじま）2、難波浦2、わか松原、御津

の松原、明石の門、浅間の岳、猪名野、有間山、

日根、園原、しきつの浦、太山、とふの浦、岩

代、三輪の檜原、いなばの山、清見潟、末の松

山、しのぶの浦、竜田山、明日香川、きさ潟、富

士、江口

各歌集における地名及びその詠出回数が、その歌集の意図的な編纂基準によるものなのか、単なる偶然によるものなのかは、各歌集毎の総合的な編纂論に俟たなければならぬが、以上の集計を通覧して概括的に言えることは、〔目的地〕としては、陸奥国・筑紫・東（あづま）等の都からの遠隔地の多さが目立つということであろう。旅の典型として遠隔地が重視されることは、ごく自然なことであろう。ただ中には、

仁和帝、みこにおはしましける時に、布留の滝御覽じにおはしまして、帰り給ひけるによめる

兼芸法師

飽かずして別るる涙滝にそふ水まさるとやしもは見
るらむ (古今集卷八「離別歌」、三九六)

長月のころ、はつせに詣でける道にてよみ侍り
ける 禅性法師

はつせ山夕越え暮れて宿とへば三輪の檜原に秋風ぞ
吹く (新古今集卷十「羈旅歌」、九六六)

のように、近距離の旅を詠んだ歌も少数ながら収められている。

次に〔詠歌地〕としては、逢坂の関・さやの中山・かへる山・白河の関等が目立つが、その他にも名所・歌枕と言える多彩な地名が多く見られる。とりわけ、『千載集』と『新古今集』とは実に多彩である。これらの地名の多くは、例えば

恒徳公家の障子に

かねもり

潮満てるほどに行きかふ旅人やはまなの橋と名づけ
そめけん (拾遺集卷六「別」、三四二)

下野国にまかりける時、尾張国鳴海といふ所に
てよみ侍りける 前中納言師仲

おぼつかないかになるみのはてならむ行方も知らぬ
旅の悲しさ (千載集卷八「羈旅歌」、五一八)

のように、地名の面白さに注目したり、地名を懸詞として用いるといった趣向を持たせている。

万葉集においても、例えば卷十二の「羈旅発思」「悲別歌」部などを通覧すると、筑紫、西国などの遠隔地の歌が比較的多い(ただし、陸奥国等の東北地方の歌はない)。その意味では、旅の典型と考える地域は、万葉集と八代集で似通った面をもっていると言えよう。

八代集における「離別歌」と「羈旅歌」における大きな特徴のひとつである、地名そのものの持つ懸詞風の面白さを趣向として詠む歌は、万葉集には少ない。万葉集においても、地名に強い関心を寄せるが、それは例えば紀伊国に止まず通はむ妻の社妻しこせね妻といひながら 一に云ふ、妻賜はにも妻といひながら

(万葉集卷九、一六七九 坂上人長)

のように、地名自身の持つ言霊に訴えかける切実さを持った表現、あるいは

波の間ゆ雲居に見ゆる粟島の逢はぬもの故我に寄そ
る兒ら

(万葉集卷十二、三一六七 作者未詳)

のように、謡い物的な性格からくる音の類似に基づく地名表現等であり、八代集の地名表現との間にはかなりの径庭がある。

三

(一)

次に内容面での八代集の特色を見てみよう。ところで、万葉集の旅の歌において目立つのは、恋歌の多さである。

白たへの君が下紐我さへに今日結びてな逢はむ日の

ため (万葉集卷十一「悲別歌」、三四八一)

朝霞たなびく山を越えて去なば我は恋ひむな逢はむ

日まで (万葉集卷十一「悲別歌」、三一八八)

旅にして妹を思ひ出でいちしろく人の知るべく嘆き

せむかも

(万葉集卷十二「羈旅発思」、三二二三)

我妹子に触るとはなしに荒磯廻に我が衣手は濡れに

けるかも

(万葉集卷十二「羈旅発思」、三二六三)

このように恋の発想の歌で占められている。もちろん

卷十二は「古今相聞往来歌類之下」の巻であるから、相聞の歌ばかりであるのは当然ではあるが、卷十二を離れても、万葉集の旅の歌に、恋歌乃至は恋歌的発想の歌が多いことには変わりはない。⁽²⁾

では、万葉集卷十二の「悲別歌」「羈旅発思」部とほとんど同じ部立名をもつ、八代集の「離別歌」「羈旅歌」はどうであろうか。「古今集」では

題しらず

読み人しらず

すがる鳴く秋の萩原朝たちて旅ゆく人をいつとかま

たむ (古今集卷八「離別歌」、三六六)

東の方へまかりける人によみてつかはしける

伊香子淳行

思へども身をしわけねば目に見えぬ心を君にたぐへ

てぞやる (古今集卷八「離別歌」、三七三)

藤原後蔭が唐物の使ひに、長月の晦日がたにま

かりけるに、うへの男ども酒たうびけるついで

によめる

平元規

秋霧のともなたちいでて別れなばはれぬ思ひに恋ひ

やわたらむ (古今集卷八「離別歌」、三八六)

のように、恋歌の表現が見られる。

次に『後撰集』では

とほくまかりける人に餞し侍りける所にて

橘直幹

思ひやる心ばかりはさはらじを何へだつらん峰の白

雲 (後撰集卷十九「離別 羈旅」、一三〇六)

下野にまかりける女に、鏡にそへて遣はしける

読み人しらず

二見山ともに越えねどます鏡そこなる影をたぐへて

ぞやる (後撰集卷十九「離別 羈旅」、一三〇七)

のような、恋歌表現を見出すことは出来るが、ごく少数に過ぎない。『拾遺集』以降もこの傾向は一層はつきりしてくる。例えば、

播磨の明石といふ所に潮湯浴みにまかりて月の

明かかりける夜中宮の台盤所に奉り侍りける

中納言資綱

おぼつかかな都の空やいかならむこよひ明石の月を見

るにも

かへし

爰しきぶ

ながむらむ明石の浦の景色にて都の月はそらに知ら

なん

(後拾遺集卷九「羈旅」、五二三・五二四)

のような男女間の贈答であっても、あらわな恋歌表現を

用いなくなっている。ただ『金葉集』には

題読人不知

おくれみて我が恋ひをれば白雲のたなびく山を今日

や越ゆらん (金葉集卷六「別」、三三七)

経輔卿筑紫へ下りけるに具してまかりける時、

道より上東門院に侍りける人のがり遣はしける

前大式長房朝臣

かたしきの袖にひとりはおかせども落つる涙ぞよを

重ねける (金葉集卷六「別」、三三八)

百首歌中に別の心をよめる 藤原基俊

秋霧のたち別れぬる君によりはれぬ思ひにまどひぬ

るかな (金葉集卷六「別」、三四五)

などのように、「別」部総数一六首中三首と、比較的多くの恋歌表現が見られる。なお第一首目の「おくれ

て」の歌は、『万葉集』の巻九・一六八一番歌と同一の

歌である。

恋歌表現が見られないという傾向は、『千載集』『新

古今集』においても同じである。

筑紫にまかりける男京にのぼるとて、門出の所

より女のもとに、のぼるべき心ちなんせぬと言

へりける返事に遣はしける 読み人しらず

あはれとし思はむ人は別れじを心は身よりほかのもの
のかは (千載集巻七「離別歌」、四八九)

あさからず契りける人の、行きわかれ侍りける
に 紫式部

北へ行く雁のつばさに言つてよ雲のうはがきかき絶
えずして (新古今集巻九「離別歌」、八五九)

題知らず 読み人しらず

朝霧にぬれにし衣ほさずして一人や君が山路越ゆら
ん (新古今集巻十「羈旅歌」、九〇二)

などに恋歌表現を見ることが出来る程度である。なお、
第三首目の「朝霧に」の歌は、万葉集巻九・一六六六番
と同一の歌である。

このように、八代集の「離別歌」「羈旅歌」は、恋歌
を離れて独自の旅歌の道を進んでいったと、ごく大雑把
にはあるがその特色をとらえることができる。

(二)

では次に、万葉集の旅の歌に色濃く見られる臨場感と
いう面において、八代集の「離別歌」「羈旅歌」部所収
歌の実態はどのようであるかを見てみたい。例えばよく
引かれる次の二首、

苦しくも降り来る雨か三輪の崎狭野の渡りに家もあ
らなくに

(万葉集巻三「雑歌」、二六五 長意吉麻呂)

駒とめて袖うちはらふ影もなしさのわたりの雪の
夕暮れ

(新古今集巻六「冬歌」、六七一 藤原定家)

とを並べてみると、万葉歌が大自然の脅威におののく旅
人の心を、臨場感あふれる表現でもって歌っているのに
対して、新古今歌においては、幽かに美的な世界を現出
させていて、現実の旅の生々しい臨場感は消えている。

八代集の両部立に収められた歌は、全体を通覧して見
ると、やはり臨場感は薄い。確かに

甲斐国へまかりける時、道にてよめる

みつね

夜を寒み置く初霜をはらひつつ草の枕にあまたたび
寝ぬ (古今集巻九「羈旅歌」、四一六)

のように、万葉歌に直結する旅寝の苦しさを詠んだ歌、
あるいは、

法皇宮の滝といふ所御覧じける御ともにて

菅原右大臣

水ひきの白糸はへて織るはたは旅の衣にたちやかさ

ねん (後撰集卷十九「離別 羈旅」、一三五六)

のように、いかにも王朝風の趣向に支えられてはいるものの、一方で旅にあつて接した目前の景物への感動の心が強く歌われている歌があることも確かである。しかし

越の国へまかりける人によみてつかはしける

凡河内躬恒

よそにのみ恋ひやわたらむ白山のゆきみるべくもあらぬわが身は (古今集卷八「離別歌」、三八三)

但馬国の湯へまかりける時に、ふたみの浦といふ所にとまりて、夕さりの乾飯食べけるに、とももありける人々の歌よみけるついでによめる

藤原兼輔

夕づく夜おぼつかなきを玉くしげふたみの浦はあけこそ見ぬ (古今集卷九「羈旅歌」、四一七)

のような、地名からの連想を駆使した歌などの夥しさは、やはり八代集の旅の歌における臨場感の薄さを実感せしめる。

これを詞書という面から見ると、「貞辰親王の家にて、藤原清生が近江介にまかりける時に、むまのはなむけしける夜、よめる」(古今集卷八「離別歌」、三六九)、「友則がむすめの陸奥国へまかりけるにつかはしける」

(後撰集卷十九「離別 羈旅」、一三三二)、「陸奥守

にて下り侍りける時、三条太政大臣の餞し侍りければ、よみ侍りける」(拾遺集卷六「別」、三三八)、「あづまへまかりける時道にてよめる」(古今集卷九「羈旅歌」、四一五)、「秋、旅にまかりけるに、いなみのに宿りて」(拾遺集卷六「別」、三四八)のように、多くの歌がごく類型化した作歌状況のもとに歌われていることが分かる。従つて、そういった状況の中で詠まれる歌の内容が、類型化し、また地名の持つ言語遊戯的側面に意が注がれるようになるのは当然であり、全体的に臨場感を欠くものとなるのである。

そしてこの旅の歌の詠出状況が類型化していく傾向はさらに進むと、「百首歌中に別のころをよめる」(金葉集卷六「別部」、三四四)、「堀河院御時、百首歌たてまつりける時、旅の歌とてよみ侍りける」(千載集卷八「羈旅歌」、五〇一)、「水辺旅宿といへる心をよめる」(新古今集卷十「羈旅歌」、九二六)というように、まったくの「机上の旅」の歌が詠まれることとなる。

ここには、かつて能因が奥州に下向せず、みちのくににまかりくだりけるに、白河関にてよみ侍りける

能因法師

都をば霞とともに立ちしかど秋風ぞふく白河の関

（後拾遺集卷九「羈旅」、五一八）

と詠み、それをまことらしくするために、我が家に引き籠り、奥州下向のよしの風評を立てさせたという（『袋草紙』等）、その「後ろめたさ」は既でない。

しかもこの「机上の旅」詠には、例えば

住吉社の歌合とて、人々よみ侍りける時、旅宿
時雨といへる心をよみ侍りける 源仲綱

玉もふくいそやが下にもる時雨旅寝の袖もしはたれ
よとや （千載集卷八「羈旅歌」、五二七）

たびの歌としてよめる 定家朝臣

旅人の袖吹きかへす秋風に夕日寂しき山のかげはし

（新古今集卷十「羈旅歌」、九五三）

のように、「路上の旅」の歌に決して見劣りのしない臨場感を備えた歌、あるいはかえってより一層冴えわたった羈旅の歌が多く見出せるのである。ここに八代集における旅の歌の到達点を見ることができると。

第一、二節において、『千載集』『新古今集』に至って、部立の面でも、また詠出地名の面でも旅の歌が充実し、とりわけ「羈旅歌」部が充実してくるのを見たが、これは内容面においては、八代集の旅の歌が、机上

詠・観念詠としての方向をたどり、しかもそれが旅の趣きの表現をより一層純化させていくという方向をたどることと軌を一にしていたのである。

おわりに

八代集の「離別歌」「羈旅歌」部の歌について、万葉の旅の歌を念頭に置きながら考えてみたが、ごく概略的な素描となってしまう。各歌集のそれぞれの独自性に即して、また個々の歌の内容に深く分け入ったの考察を今後の課題としたい。

注

(1) もちろん旅の歌は、「離別歌」「羈旅歌」の両部以外の部立にも多く存在するのであるが、本稿では、旅の歌を対象とする部立であるという意味においても、また各歌集間の比較がし易いという意味においても、この両部立に限定して考察をする。

なお、部立名は「離別歌」「離別」「別」、「羈旅歌」「羈旅」等、各歌集によって多少異なるがある。

また、『拾遺抄』も参考のために対象として扱った。

(2) 例えば、梶川信行「旅と歌」（『旅と異郷』）『古代文学講

座5〕一九九四・八〕は、万葉の「旅」のイメージの典型的な例として、万葉集巻七・二二三五番歌、巻十五・三五九二番歌をあげて、「こうした「旅」の歌は、多分に恋歌の発想と共通の基盤を持っている」と指摘し、また「へ一人を嘆く」歌は、万葉歌の大きな潮流の一つである」とも述べている。

※

八代集歌の引用は、『新編 国歌大観』に依った。ただし私に、仮名を漢字に、また漢字を仮名に改めたところがある。